成願寺

季報

131

令和4年2月18日
(2022年)

目次

「羅漢さまの功徳（最終回）」大谷哲夫……1
「戦争の頃の記憶を辿って」谷津田雄次郎……4
山内短信……8

発行　多宝山成願寺
〒164-0012 東京都
中野区本町 2-26-6
電話 03-3372-2711
制作　地人館

連載

羅漢さまの功徳（最終回）

新宿区長泰寺 住職・元駒澤大学 総長　大谷哲夫

十六羅漢尊者の様態

第十二尊者　那伽犀那（ながせな）

第十二尊者　那伽犀那

この尊者は、二世紀の後半ごろ婆羅門（バラモン）の教学を学んだが、そこに何の意義も見いだせず、尊者ローハナ（楼漢）について出家、論蔵を学びさらに三蔵の全てを修めたと云われる。後に、蘇波羅可城に住み談論を好み大弁説を奮い勝軍王と云われた。その学識の深さと弁才の凄さは、ある時、ギリシャ人のバクトリア王メナンド

「中野区魅力紹介」パネル展にて成願寺も紹介

公益財団法人特別区協議会と中野区との共催で、れきみん（山﨑記念中野区立歴史民俗資料館）企画によるパネル展『歴史と自然、にぎわいのまち中野』が開催されています。中野区の歴史、史跡、街並みを地図や写真などを交えて紹介。成願寺のパネルも展示されています。ぜひお出かけください。

会場の様子

会期：～二月二十六日（土）まで。
（日曜、祝日を除く。平日は、午前9時～午後8時30分。土曜日は、午前9時～午後5時）

場所：東京区政会館　一階エントランスホール
（千代田区飯田橋三－五－一　飯田橋駅徒歩約二分）

ロス（弥欄陀王）と討論し、仏教に帰依させたという記録が、パーリ仏典の『ミリンダ王問経』として残っている。しかし、今、この尊者は、かつての大論客として知られた弁才や学識の深さなど微塵も見せず、ただ没蹤跡のなかに閑かに正法を護持しているという。弟子の阿羅漢千二百人と半度波山に住む。

第十三尊者　因掲陀

第十三尊者　因掲陀

この尊者には大事な持ち物が三つある。この尊者は普段は、左手に経典、右手に数珠、そして肩に杖を掛けているという。経典は自分自身の内なる世界を確実にし衆生に智慧を教える物であり、数珠は限りなき煩悩を百八にまとめそれを一つ一つ繰ることによって衆生に慈悲を与えるものであり、杖はそれを一振りすると人間の中に常にわき上がってくる欲望を瞬時にして解放するものであるという。ある時、この杖の能力を疑った欲望の魔王が黒獅子に変身して襲いかかろうとしたその瞬間、尊者が杖に手を掛けただけで黒獅子はもんどりうって悶絶したという。弟子たちは、尊者の手が杖に掛からないことをひたすら祈っているという。弟子の阿羅漢千三百人とヒマラヤの広脇山中に住む。

第十四尊者　伐那婆斯

第十四尊者　伐那婆斯

この尊者は、岩窟の中にどっしりと坐し岩に同化している。岩が彼を包み込んでいるのか、彼が岩を同化しているのか定かではない。が、そこを通り過ぎる人間はもちろん、鳥獣や虫たちですら彼には気がつかない。彼は悠久なる岩と同化することで、人間界を超越し、岩の沈黙の世界との信実の対話を実践して見せているのである。弟子たちは、岩との沈黙の対話を楽しむ尊者の邪魔をする人間どもに、尊者の鉄槌が近く下されるのを固唾をのんで見守っているという。

弟子の阿羅漢千四百人と可住山中に住む。

第十五尊者　阿氏多（あした）

第十五尊者　阿氏多

ある時、この尊者のところに人間の世の中を騒がすことのみに生き甲斐を見いだしている竜化老人がやって来て、両手を大仰に広げ、尊者の弄んでいる宝珠を所望したところ、尊者はそれを完全に無視したという。我執にのみ囚われた小賢しい人間どもの、ただ反対のための反対論だけしか展開しない全く無益な議論をその宝珠に封じ込めていたからだという。かつて、弥勒（みろく）が当来成仏の記（予言）を受けるとき、自ら転輪聖王（てんりんじょうおう）となって仏法護持の礎とならんことを志願したほどの硬骨漢であった尊者は、竜化老人が、おもしろがってその宝珠を人間界に転がし、まことにくだらぬ非建設的な議論が巻き起こるのを恐れたからなのである。

弟子の阿羅漢千五百人と鷲峯山（じゅぶせんちゅう）中に住む。

第十六尊者　注茶半託迦（ちゅうだはんだか）

この尊者は、第十番目の半託迦尊者の弟で、通名を周梨槃特（しゅりはんどく）という。母は王舎城の長者の娘であったが、生活に窮し、二人はともに路傍に生まれたために、兄を大路（マハーパンタカ）、弟を小路（チューダパンタカ）という。この二人を十六羅漢に列したのは、先に出家した兄が弟に「所作の善悪行は、去来今現在、億劫に忘失せず」という偈頌（げじゅ）を与えたが、弟はそれを四ヶ月かかっても覚えられず、釈尊の示唆によってさとりを開いた故事に因むといわれている。

第十六尊者　注茶半託迦

この尊者は、仏法が愚者も賢者も決して差別しない例として古来よりしばしばあげられる。鴨長明も「栖（すみか）はすなはち浄名居士の跡をけがせりといへども、保つところはわづかに周梨槃特が行ひにだにおよばず」と『方丈記』の末尾で自問している。

この尊者は、弟子の阿羅漢千六百人と須彌山をとりまく外山の一つである持軸（じじゅく）山中（ざんちゅう）に住む。

（了）

この稿は「十六羅漢の様相」（大谷哲夫編著）を成願寺季報向けに加筆・再編したものです。

戦争の頃の記憶を辿って

淀橋在住　谷津田雄次郎

成願寺様と御縁が深いと聞いておりますが、八王子に禅東院様という禅寺がございます。そのお寺の息子の大石徹元さん（禅東院十九世住職・平成二十六年遷化）と私は府立弐中（現立川高校）の同級生で、一年から五年まで、途中でクラス替えもあったのですが、ずっと一緒でした。府立弐中では二年生までは授業も受けられましたが、それ以降は勤労奉仕の毎日でした。

徹元さんと私は昭和二年生まれ。私は十一月三日生まれで、今年の誕生日を迎えると九十四歳になります。徹元さんとは府立弐中を卒業してからも長らくお付き合いがありましたので、お元気だったらと寂しく思いますが、現在、私は都内のホームにお世話になり、スタッフの皆さんに親切にしていただきながら暮らしています。令和元年の秋の観音詣りにはみなさんとご一緒させていただいて、伊豆の名刹巡りをしたのがコロナ前の良い思い出です。いまは自由に面会や外出ができず、でもそれも世界中が同じですので仕方がないと思っておりました頃、成願寺の方丈様より昔の話を聞きたいとお話をいただきました。

私の父、谷津田義平は福島県相馬の出。父の兄・五郎が新宿御苑の近くに先に出てきて、自転車屋「谷津田輪業」をやっていました。父は五郎を頼って東京へ出てきたようです。母は新宿駅の駅前で営んでいた米屋の娘です。結婚当初は今の伊勢丹の裏あたりに暮らしていて、その後、成子坂に引っ越してきました。

私には三つ上の兄・義雄と三つ下の妹・侑子（いきこ）がいて、五人家族。父は五郎の自転車屋の仕事を手伝って、ちょうど映画の「三丁目の夕日」で描かれた自転車屋そのままの様子で、住み込みの店員さんが二、三人いて、お手伝いさんもいて、賑やかな生活でした。中古自転車をきれいに修理して、朝鮮や台湾に送ったり、事業は順調だったと子どもながらに感じ

「YATSUDA BICYCLE」の看板が見える（昭和９年）

ていました。
　ですが昭和十二年（一九三七）七月七日、日中戦争がはじまりました。さらに、ヨーロッパでは昭和十四年八月二十三日にドイツ軍がポーランドに侵攻し、それに対して九月三日にイギリスやフランスがドイツに宣戦布告して、第二次世界大戦と呼ばれる世界規模の戦争へと発展。ドイツ軍の電撃的な様子を見た日本は、日独伊三国同盟を結びました。
　そして、現在の中学にあたる府立弐中に入学した年、昭和十六年十二月八日、日本軍による真珠湾のアメリカ軍基地への攻撃を機として太平洋戦争が勃発しました。開戦当初こそ常勝無敗でした。しかし次第に戦局が悪化して兵力が不足し、昭和十八年、とうとう学徒出陣が余儀なくされたのです
　昭和十八年十月二十一日、明治神宮外苑競技場では文部省学校報国団本部の主催による出陣学徒壮行会が開かれ、東條英機首相、岡部長景文相らの出席のもと関東地方の入隊学生を中心に七万人が集まりました。兄の義雄もこの壮行会に参加しました。
　町会の人と一緒に私も駆けつけて様子を見守りましたが、すごい人数でしたので、どこに兄がいるかなんてわかりません。両親は兄の出征に対して、悲しい素振りを見せることはありませんでした。だって賑やかに送り出さなければ、辛くて行けないじゃないですか。行けば危険。死ぬとわかっている。でも行かなければならないわけですから、送り出す時ぐらいは賑やかにしていたのです。そういう時代でした。
　兄は身体が大きくて柔道三段だったと思います。日大から前橋陸軍予備士官学校に行っておりました。私は兄に呼ばれて前橋を訪ねると、学徒出陣のために全国から学生さんが集まっていました。言い表しにくい、すごい雰囲気でした。兄はここで乗馬を覚えたのですが、馬をひいてきて「これが俺の馬だよ」と見せてくれました。尻尾には白い布が付いていて、「これは後ろ足で蹴り飛ばすくせのある馬の目印なんだよ」と話してくれたのが懐かしいです。
　兄は予備士官学校を出ると世田谷の連隊に配属されました。何かの用事で訪ねて行きましたら、ちょうど食事の時刻で私にもご飯をくれたのですが、それが山盛りの麦ご飯でした。ずいぶん良い食事だなと思ったことが印象に残っています。と言いますのもその頃はなんでも配給で、十一歳から六十歳までは一人一日二合三勺（三三〇グラム）でした。育ち

盛りでもありましたので、これではまるっきり足りなかったんですね。ですから山盛りご飯が私の目には珍しいものに写りました。

兄は歩兵として鹿島灘の沿岸に配属になる予定だと教えてくれました。歩兵は山砲を武器としていましたけど、鹿島灘の沿岸警備なんて言っても山砲では敵船に届きもしないんですね。「鹿島灘の沖から艦砲射撃をくらったら全滅だよ」と話していたのをよく覚えています。

それでもしばらくして終戦となって、成子坂に帰ってくることができたのです。軍刀、拳銃などを持ち帰り、危ないので天井裏に隠していましたけど、しばらくしたら警察が回収にきたので渡しました。軍服はそのままでしたので、物資のない時代、私へのお下がりとなって、ずっと着ていた思い出があります。私は戦後、中央大学の法学部に進みましたが、そこでもお下がりの軍服を直して着ていました。

兄が成子坂に戻る数ヶ月前の五月二十五日、のちに「山の手大空襲」と言われるその日、私は父と母と妹と四人で成子坂の自宅におりました。B29が襲来したという警報が鳴って、父は母と妹を連れて当時青梅街道に建っていた鉄筋コンクリート五階建てのビルに避難しました。このビルの一階は成子松竹という映画館でした。

当時、各家から一人、空襲の時は警防団に参加しなければなりませんでした。家族を守るため、父と母と妹を兄に代わって私が守らなくてはいけないと思っていました。

B29から落とされる焼夷弾は、爆弾が束になっていて、それが落とされると束ねていたバンドが外れてバラバラになって降ってくる。家なんかに落ちますと屋根を貫通して、爆薬が起爆されて即座に激しい火がつく。木造二階建ての家が多かったものですから、あちこちで火の手があがりました。私は竹ぼうきのように、二メートルぐらいの竹の物干し竿の先に荒縄で竹の枝を括り付けて火を払うように言われました。でもそんなものではなんの役にも立ちません。こんな事をして

権利の関係で写真は
紹介できません

焼夷弾の模型（画像提供：（公財）政治経済研究所付属　東京大空襲・戦災資料センター）

いても仕方がありませんので、私はいまの都庁の付近に逃げました。そのころは高層ビル街ではなく淀橋浄水場でした。B29の爆風で、いつも静かな浄水場の水面にざぶんざぶんと二メートルぐらいの波がたっていました。私が浄水場に逃げたのは正解で、そこで夜が明けて命拾いをしました。この空襲で多くの家が焼け落ち、我が家も焼けてしまいましたが、成子松竹のビルに避難していた家族が無事でいてくれたのにはほっとしたのです。

青梅街道に栄養学校のビルがあり、その地下に焼け出された近所の人たちは受け入れてもらって避難することができた。新宿西口に製氷の会社があって、栄養学校はその会社に食料を保管してもらっていたんですね。校長先生の計らいで、その食料をいただくことができてみんな助かったのです。

茨城県の石岡に大日本飛行協会の大日本滑空工業専門学校というのがありました。この学校は、「滑空機の要因並びに製作要員指導者を積極的に育成する為」に昭和十九年に設立されていて、私は府立弐中を卒業後はその学校に進みました。私は体が小さいものですから、兵隊さんになるより設計を学ぶために進学したのです。

滑空機というのは飛行機の一種ではありますが、エンジンは着いていません。上昇気流を利用して滑空することでフライトができるのです。もともとはスポーツの要素が強かったのですが、戦争末期には軍事的色彩を強めました。

家を出て五十人ほどの仲間と寄宿生活をしていましたが、たまの休みに帰省するのが楽しみでした。ある時、休みを終えて石岡に戻る私を母親が上野駅まで見送りに来てくれました。そして貴重なおにぎりを持たせてくれたのですが、ちょっとした間に誰かに持って行かれてしまいました。戦災孤児がたくさんいた時代です。物悲しい思いで買い出しの人々で満員の電車に乗り込んだことが記憶に残っています。それから程なくして終戦を迎えましたので、私は石岡で玉音放送を聞いたのです。ですがラジオの電波が悪くてよく聞き取れずに翌日の新聞を読んで終戦を知りました。

いまの人たちにこんな話をしても、戦争中は生活がまるで違うので伝わるのかなと思いますが、思い浮かぶままに記憶を辿ってみました。

山内短信

◎春彼岸中日法要「修証義奉読会」のお知らせ

三月二十一日（月）春分の日

十一時　受付始まり

十二時　「里見浩太朗の東京お寺探訪」放映

十三時　法要

法要前にケーブルテレビで放映された「里見浩太朗の東京お寺探訪」成願寺編をご覧いただきます。

◎観音堂のすす払い

昨年十二月四日（土）、観音堂に安置される百体の観音様、全てがお堂の前にお出ましになり、有志の檀信徒のみなさんとすす払いをさせていただきました。千手観音様など複雑な造形のご尊像は特に神経を使い、優しくすすを払いました。僧侶によって中央のご本尊聖観音像様もさっぱり。ガラス戸もぴかぴかに磨かれました。最後は参加者一同でお勤めをしました。今年の年末にも行います。ご協力ください。

◎旧防空壕が紹介されました

地図や旅のガイドブックで知られる昭文社より『東京のトリセツ2』が発刊。「懐かしの東京を知る。江戸・明治・大正・昭和、時間を飛び越え、知らなかった東京を見つけよう！」というテーマで、当山の旧防空壕が紹介されました。

1月27日発売、B5変形
価格：1,980円（税込）

◎大正大学招聘教授・鵜飼秀徳先生ご来山

九月十三日、佛教大学、東京農業大学の非常勤講師を兼任される京都嵯峨野正覺寺住職の鵜飼秀徳先生が防空壕の見学に来山。寺院に遺された戦争の遺構を取材し、近日書籍にまとめられるそうです。寺院の防空壕としては長大で貴重との感想を述べられました。